

ベトナム人日本語学習者による名詞アクセントの産出 —アクセント情報とモデル音声の影響に着目して—

グエン ティ フェン チャン (大阪大学大学院)
huyentrang901226@gmail.com

1. はじめに

近年、外国人学習者の日本語習得において、日本語らしい自然な発音への要望が増加しつつある。学習者のニーズが高まるに伴い、発音習得に関する研究も盛んになっている。また、日本語母語話者が外国人学習者の発音を評価する際、アクセントやイントネーションといった韻律の影響力が単語の影響力を上回る(佐藤 1995)ことが明らかになったため、アクセント指導がさらに重視されている。しかしながら、ベトナムの日本語教育の現場では、アクセントの指導が体系的に行われておらず、教師が学習者の発音に問題を感じる時だけに指導を行うことが指摘されている(中村 2013)。そのうえ、ベトナム人学習者に対する効果的なアクセント指導を考える際に基礎となる研究はまだ少ない。

そこで、本研究ではベトナム人学習者が名詞アクセントをどのように発音するのか、そして、アクセント情報とモデル音声の有無がアクセント産出にどのような影響を与えるかについて考察することを目的として調査を行った。

2. 先行研究

ベトナム人学習者を対象とした日本語アクセントの習得に関する先行研究は轟木(1992)、金村(1999)、磯村・松田・ユパカー(2016)、グエン(2018)などがある。そのうち、アクセント情報の効果に着目した研究は管見の限り、磯村・松田・ユパカー(2016)とグエン(2018)のみである。

磯村・松田・ユパカー(2016)はベトナム人学習者 7 名とタイ人学習者 11 名を対象として、名詞単独 42 語とそれぞれの名詞を含むキャリアセンテンス「～です」の発音調査を行った。タスク 1 ではアクセントの情報を何も与えずに、タスク 2 ではアクセント記号とモデル音声と同時に提示し、タスク 3 ではアクセント記号のみを提示し、学習者に発音してもらった。調査結果は、タスク(1)の場合は正答率が半分以下(35%)であり、ベトナム人学習者の尾高型の正答率がタイ人学習者と比べると高いという傾向が確認された。この傾向はキャリアセンテンスにおいて「～です」と共起させたことが原因であると主張されている。また、タスク(2)を行うことにより、正答率が大幅に改善し(正答率: 86%)、アクセント情報だけを示すタスク(3)ではタスク(1)よりも正答率が高くなった(53%)。そして、アクセント記号を示すだけでも学習者のアクセントの正答率が向上するということが示された。

グエン(2018)はベトナム人学習者 10 名を対象として 1～4 拍の名詞 42 語及

びその単語を含むセンテンス（「～が有ります/います」と「～です」）を用いて読み上げ調査を行った。調査結果は、アクセント情報を提示せずに単語とセンテンスを自力で発音するタスク 1 の正答率が 34.5%であった。次にアクセント線で単語の各拍に高低の高さを明確に提示するタスク 2 では正答率が大幅に上がった（83.1%）。また、タスク 1 では、助詞「が」を高調で発音するが、「～です」センテンスでの後続語「です」を低調で発音する傾向が強いため、「～が有ります/います」センテンスでは平板型の出現が際立って高く、「～です」センテンスでは尾高型の出現が最も高いことが明らかになった。つまり、キャリアセンテンスはアクセント産出に影響を与えるということが確認された。そして、タスク 2 では、アクセント線を提示ことはより正しい日本語の韻律を実現するために、効果があると示された。

これらの先行研究において、アクセント情報がアクセントの産出に正の影響を与えるということが共通していた。しかし、アクセント記号とモデル音声ではそれぞれどのような影響を与えるのか、また、先行研究のタスク提示順序とは異なる順序で調査を行う場合、アクセントの正答率がどのようになるのかという課題がまだ残っている。

以上の点を踏まえ、本稿ではアクセント線とモデル音声の有無に関する 4 つのタスクを用いて、ベトナム人学習者のアクセント産出がどのように変化するかを考察し、報告する。

3. 調査内容

3.1. 被験者

被験者はベトナム中部出身の DN 大学の日本語専攻大学生 30 名（2～4 年生の各 10 名）である。すべての被験者は大学入学と同時に日本語学習を始め、来日経験はなく、年齢は 20～22 歳である。

3.2. 調査手順

被験者にとって既習語で、1～3 拍の特殊拍を含まない名詞 27 語（表 1 に参照）及びその単語を含むセンテンス「～があります/います」を用いて、読み上げ調査を行った。

表 1 調査語リスト

1 拍	(0) 子・毛・図 (-1) 歯・字・絵
2 拍	(0) 壁・水・国 (-1) 馬・川・色 (-2) 海・今・春
3 拍	(0) 田舎・魚・車 (-1) 男・言葉・表 (-2) 七つ・お菓子・中身 (-3) 花火・高さ・緑

本調査では以下のタスク①～④の順番で学習者に一回ずつ発音してもらい、録音した。まず、アクセント情報を何も与えない単語とセンテンスを PC のディスプレイに表示し、学習者に自力で発音してもらった（タスク①）。その後、アクセント線が書かれてある単語とセンテンスを見ながら発音してもらった

(タスク②).

例： う み う みがあります

次に母語話者のモデル音声を聞いてから再現してもらった(タスク③). 最後に, 学習者はアクセント線を見ながらモデル音声を聞いた後模倣して発音した(タスク④). 本調査を行う前に, 被験者には調査目的, 調査手順, アクセント線などについて簡単な説明をし, 名詞を強調せずに発音するように指示した.

3.3. アクセントの評価

被験者が読み上げ調査で発音したアクセントを以下の表2の基準に基づいて聴覚判定を行った.

表2 アクセントの聴覚判定基準

パターン	内容
(a) 名詞(正) + 助詞(正) → 正答	名詞も助詞「が」も正確に発音される場合
(b) 名詞(正) + 助詞(誤) → R	名詞が正しく発音されるが助詞「が」が正しく発音されない場合 (例: 「かべが」 LHH → LHL : R 「うみが」 HLL → HLH : R
(c) 名詞(誤) + 助詞(誤/正) → 誤答	名詞が正しく発音されない場合

4. 調査結果と考察

4.1. 全体の結果

正答率はタスク① < タスク② < タスク③ < タスク④の順で高かった(表3に参照).

表3 全体の結果 (%)

	正答	R	誤答
タスク①	37.9	34.7	27.4
タスク②	71.9	17.4	10.7
タスク③	87.4	7.9	4.7
タスク④	91.1	4.6	4.3

タスク①の段階では正答率が低く(約 37.9%), R 率が正答率の次に高かった. 本調査の結果は磯村・松田・ユパカー(2016)とグエン(2018)の結果を支持していると言える.

タスク②では, アクセント線が表示されることで正答率が大幅に上がった(71.9%). また, 単語の各拍の高低の高さのみならず, 助詞「が」の高さもアクセント線で明示されたため, 助詞「が」を正しく発音させることができ, R 率が 34.7%から 17.4%に下がった.

そして, モデル音声を聞いた直後に模倣するタスク③の正答率は, タスク②

より高く（87.4%）、R 率も 7.9%に下がった。最後に、タスク④では正答率が最も高かった（91.1%）。そして、R 率も誤答率も 5%以下に下がった。

表 4 拍数別の正答率（%）

	タスク①	タスク②	タスク③	タスク④
1 拍語	50.6	80.0	89.4	95.0
2 拍語	56.7	82.6	93.3	97.0
3 拍語	30.3	69.4	86.9	88.1

また、上記の調査語拍数別の正答率を示す表 4 から、各拍数の単語の正答率がタスク①<タスク②<タスク③<タスク④の順で高くなっており、全体の結果と同様の傾向が見られる。タスク①～④において、2 拍語の正答率が最も高く、3 拍語の正答率が最も低い傾向が見られた。タスク①では、3 拍語の正答率は約 30%であったが、アクセント線が表示される（タスク②）ことによって正答率が倍に上昇した（69.4%）。さらに、モデル音声があるタスク③とタスク④でも正答率が大きく上昇した（85%以上）。つまり、アクセント線とモデル音声が表示されれば、発音で苦手とされる 3 拍語であっても適切なアクセントで発音できることが示された。

4.2. アクセント線とモデル音声有無とその影響

アクセント線とモデル音声有無による影響についても考察した。

表 5 アクセント型別の正答率（%）

調査語の アクセント型	出現される アクセント型	タスク①	タスク②	タスク③	タスク④
平板型	平板型	74.4	86.3	96.7	97.4
	尾高型	13.0	5.9	1.1	0.4
	中高型	11.1	7.8	2.2	2.2
	頭高型	1.5	0.0	0.0	0.0
尾高型	平板型	74.1	33.3	15.9	8.9
	尾高型	13.3	57.0	78.1	85.9
	中高型	11.5	9.6	4.8	4.8
	頭高型	1.1	0.0	1.1	0.4
中高型	平板型	55.6	14.4	7.8	3.3
	尾高型	4.4	6.7	7.8	7.8
	中高型	40.0	77.8	83.3	88.9
	頭高型	0.0	1.1	1.1	0.0
頭高型	平板型	37.8	6.7	1.1	0.6
	尾高型	4.4	1.1	0.0	0.0
	中高型	13.3	3.3	1.7	0.0
	頭高型	44.4	88.9	97.2	99.4

調査語のアクセント型別の正答率を示す上記の表 5 より、タスク①の段階では、助詞「が」を高く発音する傾向が強いため、平板型の単語の正答率が極めて高かった（平板型：74.4%→正答；尾高型：74.1%→R；中高型：55.6%→誤答；頭高型：37.8%→誤答）。また、尾高型の単語であるが平板型で発音されることが多いため、正答率が低かった（13.3%）。

ベトナム語は声調言語で、一音節に一つの声調が付与される。その音節が音の高低または変化（曲調）によって区別される。そのため、ベトナム人学習者は音節を音単位として意識していると考えられる。よって、日本語のアクセントを産出する際、アクセント線で単語の各拍に高低の高さが明確に表示すれば、適切なアクセントで産出できるという仮説が立てられる。本調査のタスク②の結果では、頭高型、尾高型と中高型の正答率が約 40%増加した。すなわち、アクセント線を表示することでアクセント型の産出が大きく改善されることが示唆された。

また、タスク③の正答率がタスク②より高いことが明らかになった。よって、アクセント産出にはアクセント線よりモデル音声の方が効果的であると言える。なお、全体的にはタスク④の正答率はタスク①、②より高かったがタスク③と比べると、大きな差が見られなかった。

さらに、タスク①～④の平均値を比較、分析した（Tukey-Kramer 法）結果により主効果が認められた。多重比較の結果は以下の通りである。

表 6 タスク間多重比較結果（%）

group	diff	lwr	up	p adj
T1-T2	33.950617	24.025543	43.87569	0.0000000
T1-T3	49.506173	39.581099	59.43125	0.0000000
T1-T4	53.209877	43.284803	63.13495	0.0000000
T2-T3	15.555556	5.630482	25.48063	0.0004672
T2-T4	19.259259	9.334185	29.18433	0.0000095
T3-T4	3.703704	-6.221370	13.62878	0.7652160

表 6 の検定結果より、有意水準 5%では、タスク①-タスク②、タスク①-タスク③、タスク①-タスク④間にそれぞれ有意差が認められたため、全体的にはアクセント線、モデル音声提示がアクセント産出に有効であると言える。また、タスク②-タスク③、タスク②-タスク④間にも有意差が見られたため、アクセント産出を指導する際、アクセント線よりも、モデル音声またはアクセント線＋モデル音声を使用した方が効果的であると考えられる。なお、タスク③-タスク④間には有意差が認められない（p 値>0.05）ため、モデル音声のみ使用しても、アクセント産出指導には十分有効であると言える。

しかしながら、タスク③、タスク④に高い正答率が見られるのはタスク②の次の順で行われる可能性もあるため、今後はタスクの順を変えて再検討する必要があると考えている。

5. 終わりに

本研究では、アクセント情報とモデル音声の有無がベトナム人学習者のアクセント産出に与える影響を検討するため、4つのタスクを用い、読み上げ調査を行った。タスク①～タスク④の正答率はそれぞれ 37.9%, 71.9%, 87.4%, 91.1%と有意に高くなった。

タスク①の段階では助詞「が」を高く発音する傾向があるため、正答率が低く、R 率が際立って高かった。タスク②では、アクセント線が表示されるだけで正答率が大幅に上がった。つまり、アクセント線は正確なアクセント産出に有効であることが示された。

モデル音声を用いられるタスク③では、各アクセントパターンの正答率が 78%～97%に上昇した。そして、タスク④では、全体の正答率が 91%まで上昇し、学習者が母語の韻律の影響から脱却し、正確度が高い発音を再現できることが明らかになった。これらのことから、アクセント線とモデル音声を示すことが、発音の正確さに大きく影響することが分かった。しかし、正答率が上がることが学習者のアクセント習得を意味するものではない。そして、いかに習得に繋げていくかについては今後より詳しく調べる必要である。

以上の調査結果が、ベトナム人学習者によるアクセント産出に影響を与える要素の一端を示し、学習者へのアクセント指導への一助となることを望む。

参考文献

- 磯村一弘・松田真希子・ユパカーフクシマ (2016)「タイ語話者およびベトナム語話者による日本語アクセントの実験ーアクセント記号の効果に注目してー」『2016 年日本語教育国際研究大会口頭発表』,1-4
- 金村久美 (1999)「ベトナム語母語話者による日本語の発音の音調上の特徴」『ことばの科学』名古屋大学言語文化部言語文化研究会 第 12 号,73-91
- 佐藤友則 (1995)「単語と韻律が日本語音声の評価に与える影響力の比較」『世界の日本語教育』国際交流基金 第 5 巻,139-155
- 轟木靖子 (1992)「ベトナム語母語話者の日本語名詞の発話に伴う音調について」『日本語の韻律に見られる母語の干渉 (2)』国立国語研究所,105-139
- 中村則子 (2013)「非母語話者教師と母語話者教師の発音指導ーベトナムにおけるアンケート調査の結果からー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』第 39 巻,113-124
- グエン ティ フェン チャン (2018)「ベトナム人日本語学習者による日本語の名詞アクセントの産出」『日本語・日本文化研究』大阪大学大学院 言語文化研究科日本語・日本文化専攻 第 28 号,129-138
- グエン ティ フェン チャン (2018)「ベトナム人日本語学習者による日本語の名詞アクセントの産出ー名詞接続の助詞のアクセントを中心に」『間谷論集』日本語日本文化教育研究会 第 13 号,153-174